

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	14
瑪瑙集	26
紅玉集	28
1月号月評	30
惠贈句集拝見 (42)	32
惠贈俳誌拝見 (13)	34
特別作品「緑のアイランドI」	36
琥珀集作品鑑賞	38
瑠璃集作品鑑賞 I	39
II	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
俳誌交歓	43
「山の駅」共鳴句	44
ひこぼえ通信 (14)	47
疵の国父の蒼天 (34)	48
愛宕・化野念仏寺吟行記	50

今月の一句

初荷発つうしろに刀自の切火声

桂樟蹊子

(昭和六十四年作)

昭和六十四年ごろの京都室町あたりは、老舗や問屋が軒を並べていた。その頃の正月の光景であろう。特に「中京のしきたり」の厳しい明治生まれの刀自は躰が厳しかったようである。一月二日の初荷が発する時刻の手締めのおと「おめでとうさん」の声をうしろに「切り火」をする刀自の白髪をみられた師は、その凜とした姿に感動された一句であろう。

隆子

縞襦袍

塩路隆子

新蕎麦にささくれの箸親しかり

跳ね返る干唐辛子蔵の口

長雨に燥ぎ過ぎです榎櫃の実

誰が為に啼く夕鴉秋しぐれ

「火の用心」と九官鳥や冬立てる

捨てず着ず柳行李の縞襦袍

灰搔けばへつつひ猫の目の光る

一月号光耀抄

塩路 隆子選

山間の暮れて鹿鳴く遠衍
千年を褪せぬ朱の裂秋深し
円錐の藁塚アト夕日影
三輪山にけぶる小雨や神の留守
盆栽は考の真似ごと小さき秋
ハロウインの黒猫魔性極まれり
石山寺の山門近く椿の実
溪谷に伊予の青石薄紅葉
梟の羽音に竦むバードシヨウ
山家の灯見えての安堵芒径
一木の毘沙門天や鴟猛る
小谷なる江のふるさと末枯れて
緞帳の如きカーテン曳きて冬
名水に銀杏の手を洗ひけり
食の秋家族B級グルメかな
冬鳥を待ちて母なる大湖かな
愛宕護符貼れる厨にきのこの香

伊東 和子
鈴木 照子
山口キミコ
笠井 清佑
笹井 康夫
宮田 香
増田 一代
片岡久美子
川崎 利子
北尾 章郎
坂上 香菜
竹内 悦子
森下 康子
五十嵐 勉
池田加寿子
小澤 菜美
和田 郁子

木曾三川水張り詰める冬の朝
 空港に鳥となるとき秋高し
 大銀杏木枯一号発信す
 大袈裟なゴールドのタグ松葉蟹
 水底に良きことありや鳩潜く
 酒蔵の手筈万端新麴
 芒原点となりたる人の影
 腫瘍いま残す選択大根煮る
 間歩行けば銀山絵巻秋曇り
 逆立ち羅漢ムンクの羅漢紅葉降り
 国宝の茶室開きや石菫の花
 北風や湖北の駅の小座布団
 愛宕路の保存家屋や杜鵑草
 ニュートンに従はぬあり木守柿
 虫の音に更けゆく旅や坊泊り
 加賀染の花嫁のれん冬座敷
 壮年の父しか知らず鰯雲
 秋澄むや牛臥す牧の天抜ける
 野良猫の堤をゆるり秋うらら
 フアッションの仕上げは胸の赤い羽根

山崎 里美
 松岡 和子
 三川美代子
 宮崎左智子
 藤見佳楠子
 中村ふくこ
 中川すみ子
 新実 貞子
 西垣 順子
 田中 芳夫
 小林 成子
 辻 知代子
 坂根 宏子
 塩路 五郎
 清水侑久子
 田下 宮子
 阪本 哲弘
 谷口 俊郎
 山本 孝夫
 桂 敦子

千年の菅公産井水澄める
 魯田となりて一村蘇る
 山門の鬼笑ひけり柘榴割れ
 家中に暖色集め冬支度
 万本の萩千態の露座仏
 白虎隊の自刃の跡や露寒き
 太陽のやさしさに鳴く懸巢かな
 敦盛の騎馬像凜々し秋深み
 盆歌舞伎若きおやまの宙がへり
 浮世絵に江戸世の遊び小六月
 秋晴に響く鼓笛の歩調かな
 酒蔵を抜けたる小径吾亦紅
 鬼の子は雲梯好きな児に見られ
 鶴翔ける秋天但馬かな
 今年柿たわわに実り過疎の里
 朝寒や地下四階の駐車場
 シャンソンを聴きて広がる秋意かな
 嬰の機嫌柚子湯に唄ふアンパンマン
 有限ですと憎飄々と落葉掃く
 想像の出来るが人よ芭蕉の忌

紀川 和子
 国包 澄子
 小西 和子
 石川 かおり
 中本 吉信
 井口 淳子
 杉本 綾
 長濱 順子
 福本 すみ子
 藤本 秀機
 高谷 栄一
 能勢 栄子
 栗倉 昌子
 飯田 美千子
 伊藤 和子
 岡 佳代子
 大島 みよし
 大松 一枝
 落合 晃
 山崎 真義

パソコンの迷宮ぬけて冬の月
 道端にハロウィン南瓜売れ残る
 外套に期限切れなる整理券
 蘇る古刹の銀杏黄葉かな
 百仏の赤き前垂れ小春の日
 秋澄むや峽にをなごの船頭唄
 風音の変る「西の湖」葦枯るる
 歯ざはりの絶妙かにのフルコース
 もてなしはきのこづくしや郡の宿
 濡れそぼつ寅さん像や冬の雨
 玄界灘の冬涛激し防人歌
 水運ぶ烏帽子直垂秋さやか
 掃き寄せて薄紅色のこぼれ萩
 お茶会へ妣の帯しめ秋日傘
 秋深しハンバーガーは好きに食ふ
 コスモスに埋もれて撮るウエディング
 ハロウインのせりふ出てこずならめっこ
 秋展の名宝にありガラシャの字
 ひちりきに心やすらぐ秋の雨

山本 節子
 横田 矩子
 吉田 希望
 和田森 早苗
 前川ユキ子
 松田 和子
 松田 洋子
 秦 和子
 中井登喜子
 西田 史郎
 西村 敏子
 難波 篤直
 田中 浅子
 辻 香秀
 常田 創
 寺田 光香
 土井くみこ
 佐用 圭子
 鷺見たえ子

琥珀集

朱の裂

鈴木 照子

チエック柄の古代作業着秋うらら(正倉院炭四句)

蘭奢待の切り口三つ秋寒き

天平を照らす秋灯LED

千年を褪せぬ朱の裂秋深し

栗餅や土佐街道の町家カフェ(高取三句)

人とまがふ畦の案山子に背の愁ひ

はやり着し町家に茶髪案山子かな

石路の花

伊東 和子

御苑

山口キミコ

山間の暮れて鹿鳴く遠訝

一葉落つ大地へ返す樹の儀式

石垣を飛び出すごとき石路の花

晩秋や世界遺産の塔寂びて(醍醐寺)

真直なる五線の築地もみぢ照る

ふる里の山まだ青し秋土用

恩師らと校歌を熱く夜半の秋

円錐の墓塚アト夕日影

諸蔓を販ぐ媼の小銭缶

田楽の華やぐ衣装文化の日

松手入終へし御苑の公開日

色変へぬ松の大木御苑かな

観音の垂るる天衣に風白き

摘まみ菜の百円の嵩道の駅

三輪山

笠井 清佑

三輪山にけふる小雨や神の留守
三輪山の末社揃うて神の旅
奈良の鹿総出で送る神の旅
軒先の煤け杉玉神無月
黄落や春日の杜のけもの道
冬日和門（かど）に干されし醬油樽
醬油屋の匂ひ立つ土間小六月

小さき秋

笹井 康夫

谷の辺の野菊に迫る杉の闇
ななかまど色に映えたる白き雲
盆栽は考の真似ごと小さき秋
神棚の清掃すませ神の留守
きちきち飛蝗雄の客のせ飛行かな
戻し舟秋深みゆく嵐山
霖々の流せる色素紅葉溪

菊千を

宮田 香

黄落や戌辰戦址の風化文字（鳥羽・伏見）
菊千を飾るゴールへ三冠馬
群生のこすもすは野のタペストリー
ハロウインの黒猫魔性極まれり
「赤とんぼ」の里はモノクロ秋深き
リゾットの茸や欧州旅行談
秋澄みて小舟往き交ふ遠岬

椿の実

増田 一代

石山寺いしやまの山門近く椿の実
対岸に明りちらほら寒露かな
黒雲の覆ふ稜線冬の雷
冬浅し薄着で暮らす温暖化
山茶花のこぼるる街路紅糸のぐ
冬に入る今宵の夫は道後の湯
落鮎は何匹ですか魚籠覗く

初紅葉

片岡久美子

溪谷に伊予の青石薄紅葉

秋来ると木道修理里の人

溪谷を逸る瀬音や櫨紅葉

注連張りし路傍神木初紅葉

秋冷の部屋に絵皿の干支兎

秋風や手を振る母をふるさとに

もみづるを玻璃に隔ててカフェテラス

栗の飯

北尾 章郎

白み来てしばし静もる月の宴

稲雀避難訓練愈らず

放射線に色の欲しかり大気澄み

秋刀魚買ふ震禍の話絶えもせず

山家の灯見えての安堵芒径

桜紅葉散り急ぐ性ひきずりて

アイフォンを自在にこなし栗の飯

山の宿

川崎 利子

茶の花に古りし魚板や利休の碑（南宗寺）

梟の羽音に竦むバードショー

彫深き釈迦の尊顔秋深む（水間釘無堂）

釘無堂の古佛と対話秋ひと日

弥陀の句碑に蓑虫這出て下生乞ふ

母の笑顔に安堵の思ひ小六月

胡桃落つ音に目覚めて山の宿（塩の道にて）

隠れ里

坂上 香菜

近江路の紅葉黄葉の文化園（滋賀県立近代美術館）

隠れ里の「ずずいこ様」や紅葉館（白洲正太郎誕生100年展）

豁然と見開く古面小春の日（油日神社御物「福太夫」）

神南備の麓の里や櫓伸び（油日岳）

一木の毘沙門天や鷓猛る（櫟野寺）

今もなほ隠れ里なり冬紅葉

峡深く木の墓標あり枯尾花

江姫

竹内 悦子

名水

五十嵐 勉

照紅葉お市の方の小袖てふ

小谷山江も見たるや雪ほたる

もみづれる小谷城址の磴嶮し

小春風江の生まれし地に立ちて

小谷なる江のふるさと未枯れて

雨女ゐての中止や紅葉狩

神の留守知りつつ拝むツア―客

てくまくまやこん

森下 康子

今年米

池田加寿子

京町の路地ろっじどんつき冬に入る

焼諸屋去りて匂ひを残しけり

もういいかいまだまだですよ草虱

原発の反対デモや秋暑き

緞帳の如きカーテン曳きて冬

ロールカーキのマロン蕩けるティータイム

てくまくまやこん犬のおすわり小春の日

縄跳びの園児四五人小春かな

参道に十日の菊や大覚寺

龍水を欲れる秋暑や花頭窓

名水に銀杏の手を洗ひけり

高瀬舟絶えて映せり鱗雲

古書市の本を両手に秋の暮

子を背負ひ逃げる飛蝗や草の上

本陣に残るつるべや今年米

食の秋家族B級グルメかな

霧雨や湖面にほのと竹生島

コスモスの「畑の棚田」や人も見ず

青空に譜面を描くあきあかね

銀山の古民家に群れ聖霊花

軒下の匂に穏やかな萩の花

瑠璃集

記憶

阪本 哲弘

健忘と云うて笑ひぬ爽やかに
金賞のメダルを胸に案山子翁
壮年の父しか知らず鱗雲
葡萄食ふ記憶の一つひとつかな
同病へ貸す医学書やそぞろ寒

虫の声

清水侑久子

観音の胎内めぐり暮の秋
流れ橋そぞろ歩けば苔を刈る
うすら寒熱いココアを淹れにけり
宿の灯の遠くに見えて虫の声
虫の音に更けゆく旅や坊泊り

根子岳・四阿山行

谷口 俊郎

秋澄むや牛臥す牧の天抜ける
登り来し標高二千草紅葉
落日を背に下りけり薄原
白樺の林に翳り秋の暮
遊び疲れ歩み疲れて暮の秋

花嫁のれん

田下 宮子

加賀染の花嫁のれん冬座敷
しみじみと夫在りてこそ冬温し
菊薫る亡父の遺愛の蓄音機
食材はシェフのこだわり冬ディナー
塩盃に「赤穂浪士」の新走

竹の春

山本 孝夫

野良猫の堤をゆるり秋うらら
闇へ出づ木犀の香に包まれて
願掛けに触れし観音冷やかに(愛宕安仏寺ふれ愛観音)
秋の花愛でつつそぞろ嵯峨野徑
深閑の黄泉路へ誘ふ竹の春

秋清し

ファッションの仕上げは胸の赤い羽根
夜の雨にこぼれむばかり萩の花
柿たわわ稲荷の礎の千余段
幾百の鳥居くぐりて秋清し
風情増す秋の七草風受けて

桂 敦子

朽ち船

魯田となりて一村蘇る
似たやうなドラマばかりや日短か
色香なほ蕾に秘めて菊花展
朽ち船を寄る辺に岸の赤とんぼ
嗄がれの声が手慣れの鱈捌き

国包 澄子

鴛日和

千年の菅公産井水澄める
今日よりは八十路の旅や鴛日和
地下鉄にうつらうつらと小春かな
バスの中混み合うて来し着ぶくれて
万両の日ごと鮮やか風の中

紀川 和子

玄冬の日

渋皮のぼろり剥れし新種粟
気をそそる紅葉名所のアラカルト
検診の結果待つ身やそぞろ寒
秋惜しむ日ざし眩しきカフェテラス
穏やかな玄冬の日を纏ひけり

小林 久子

秋の雨

湯の里の川のせせらぎ柿たわわ
秋空へ素屋根小さき天主閣（姫路城）
はかなげな花びら淡し十月桜
縫針を持ちて一日や秋の雨
長雨に濡れたる牡鹿角切られ

木戸 宏子

鬼笑ふ

山門の鬼笑ひけり柘榴割れ
父の爪切る和み刻秋の宵
ささやかな気遣ひ程の返り花
今朝の冬比叡行者に行き合へり
兎ら過ぎし後に香れり花柊

小西 和子

一月号月評

塩路 隆子

平成二十四年最初の月評である、気を絞め直して書かせていただくと思う。継続は力、俳句の上達の方法はと聞かれると虚子は「継続」と答えたという。俳句を志して「瓊」に入会された集団です。今年も変わらず頑張っていたらと願うばかりである。

山間の暮れて鹿鳴く遠嶺

伊東 和子

丹波ご出身の作者が、お友達の家を訪ねられた時の作品である。重なり合った山間の日暮れは早い。暗闇の峪から聞こえる哀愁を帯びた鹿の声が、山々に反響し、響となって聞こえろと言おう情景をうまく句にされた。鹿の鳴声そのものの響きと、瞬間の間を置いて響となつて返ってくる虚ろの響きを作者はどんな思いで聞かれたのであろうか。初体験の作者の感動が、こうした一句となり、胸に記録されたであろう。事象をさらりと述べられていることが、より余韻を深くしていい句に仕上がっている。この詩情を大切に育てて頂きたい。

千年を褪せぬ朱の裂秋深し

鈴木 照子

正倉院展を訪ねての作品である。美術品や絵画など館内の作品を句にすることは難しい。ともすれば上すべりに終わることが多いなか、桂樟蹊子の薫陶を存分に受けた作者の実力には不動のものがある。他にも関連の三句があるが、それぞれ対物をしっかりと見据えた立派な作品に仕上がっている。秋深い中の朱の布は特に印象的であつたに違いない。しかも往時の色の鮮やかさをそのままに残している布切れを見つめる作者の感動がそのままに表現されている。いい作品を見せて頂いた。

円錐の蕪塚アト夕日影

山口キミコ

切株がのこる刈田のあとにぼつりぼつりと残された蕪塚が長い夕日影をひいている光景は田舎の晩秋の風物詩であろう。連想としてその田園風景の続きには残り柿や木守柿のある農家がありそれをつぎに来る鳥たちの姿も見える。最近コンバインなどの活躍で、蕪塚を見ることも少なくなつたが手作業で取り入れをしている地方では今もこの光景にお目にかかれるのであろう。この句「アト」と受け留めたので句が近代に近づいた感が強くなっている。田園地帯の光景を新しい感覚で受け止めているのがお手柄の作品である。(以下略)